

49 松本順と北海道

——特にその来道と足取りを追って——

宮下舜一

古い大学東校の史料の中に、一見奇異の感を抱く辞令記録が見られる(東大史料編纂所蔵、順天堂史 上巻所収)。

「蝦夷地病院医師頭取 松本良順 中博士に準シ 月給二百両」

箱館戦争が終結し、蝦夷地の開拓が急務となった。二年七月、明治新政府は開拓使を設置し、同年八月蝦夷地は北海道と改称された。気候・風土を異にする北地の開拓には、医療問題特に西洋医学の導入が必要との観点から、開拓使は道内各地に展開する開拓病院を担当する医官の人選、任地、官等級の決定を含め医事一切を大学東校(正確には明治二年十二月以前は「医学校兼病院」と称す)に委託することになった。

冒頭に示した辞令録には日付の記載はないが、蝦夷地

の文字がまだ使用されていることから考えると、大学東校が開拓使医官の人選を始めた明治二年八月前後の任命記録と推察される。この時期、良順(四年十二月、順と改名)は、会津に赴いて官軍に敵対した罪を問われ、加賀前田江戸屋敷預かり禁固の身の上であった。服罪中の良順が、北海道開拓病院頭取に任命されたのは如何なる理由によるものであろうか。

当時の大学東校には岩佐純(大学少丞)を初めとして、所属教官の多くが良順の親しい縁故者で占められていた。これら良順の早期釈放を願う友人らの熱心な運動が成功して、良順は開拓病院に欠くべからざる人材として大学東校から推薦され、特赦による北海道赴任の人事が決定し、大学東校の辞令集にその名を残すことになったものと思われる。然し、開拓使での正式採用の段階で、この異例と言うべき人事は否決され、大学東校での決定は中止乃至保留となったのではなからうか。

明治二年十二月上旬、良順は従来の閲歴に徴してその罪状を免ぜられ自由の身となった。

その頃、横浜に在った実父佐藤泰然からドイツ留学中

の佐藤進(泰然孫)に送られた手紙の中に、良順の消息を伝える一節がある。(泰然より進宛、明治三年正月三日出)

「……(略)……松本(良順)も十二月六日御免に相成、

是も箱館之病院取達之頭取に可被仰付風聞に御座候、此間中横濱へも参り四五日逗留いたし候、何れも勢ひよろしく御座候……(略)……」

この書簡から良順の免罪の日付十二月六日が判る。その後間もなく赦免の挨拶を兼ねて父泰然を訪れたのである。この時点では開拓病院頭取就任の話が未だ全く消滅していないようである。いづれにしても良順の開拓使医官就任は幻の辞令だけに終わったが、幽閉の身に在った一時期、新天地北海道で西洋医学を駆使した医療開拓の夢を、良順は描いていたのかもしれない。

良順自身の渡道は無かったが、良順の指導を受けた長崎医学傳習以来の門下生或いはそれに準ずる門弟の多くが開拓使の医官となり、北海道初期の医療を担って活躍している。

脱落を恐れるが主なる人名を列挙して置く。

〔開拓使医官として活躍した松本順門下生〕

①長崎留学時代の門人……渋谷良次、八尾貫吾、林洞斎、馬島春庭(讓)、南部精一、佐々木東洋(赴任の形跡は無い)

②江戸医学所及び松本私塾の門弟……深瀬洋春、平泉泰造、有馬元函、瀧廻凌雲(多喜之友三)、相良俣齋

③会津戦時病院での聴講門弟……平井浪江、小沢謙益、赤城信一、六角謙三、南部精一(①と重複)

以上、松本順と北海道の関連に就いて若干の解説を試みたが、演者はたまたま小樽の旧医家に所蔵されていた古い一葉の写真の中に松本順の姿を見出した。この写真の発見が契機となって、明治二十四年の初夏、松本順が北海道を来訪している事実が確認された。今回はその調査経過と滞在二十六日間に及ぶ足取りを中心に報告したい。

(札幌市)